The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>川添裕『江戸の見世物』
Author(s)	横川, 公子
Citation	デザイン理論. 2000, 39, p. 129-132
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52937
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

川添　裕『江戸の見世物』
2000年7月　岩波新書681　岩波書店

横川公子／武庫川女子大学

本書の「まえがきに代えて」には，近世後半の見せ物全体構成とジャンル別変遷をあらわす立派な統計グラフが提示されている。江戸の見世物の内容が細工，曲芸・演芸，動物，人間の4ジャンルに分けられ，各興業回数の時代的変遷がグラフ化されたものであり，見世物の多彩さとともに，氏による長年に亘る資料渉猟の積み重ねを物語るものである。引用文献の示唆に従って，『芸能史研究』148号に掲載された，氏の研究ノート「見世物をどう理解するか ── 近世後期の興業件数と見世物絵から ──」を拝見すると，氏の問題意識がこのグラフによって代弁されていることがわかる。現代一般に流布している見世物観がかなり独特な紋切り型のもので，たとえば『変態見世物史』（藤沢衛彦，文芸資料研究会，1927）などから出発した「変態」見世物観が，せいぜい現代に連なる一世代か二世代の体験に根ざしたもので，「もうずっと前」からのものではないと指摘される。このような氏の立場は「見世物における現代と過去の明らかな落差」に答えを求めることにあり，「明治の様相を精査しつつ，近世から明治へ，現代から明治へという，両側からの脈流を探る」ために，そこへ向かっての一歩として，「近世後期の見世物のマクロな図柄をとりあえず提示」しようとすることにある。この研究ノートから引用された上述の統計グラフは，こうした氏の問題意識に明快な拠り所を与えているとおもわれる。

このような問題意識にのっとって，氏は先行の見世物研究を読み直すためにも一次資料を発掘・尊重する姿勢を堅持しつつ，江戸後期の代表的な見世物であった細工をはじめ，動物，軽業，生人形が人々を魅了した様子を，実例に即して生き生きと描き出しておられる。

ところで筆者は見世物の研究者ではない。恐らく本書の内容を消化しきれないままに，書評・紹介というようなおこがましくも大それたことをさせていただいていることになろう。ただし自己弁護になるかも知れないが，筆者が本書を取り上げたきっかけは，生活美学という生活に広く基盤を置く切り口に関心があり，目下そうした課題を発掘することを目的として設立された研究所に席をおいていること，見世物研究の一端をテーマとして，博士号を取得した卒業生が身近にいたことなどにある。また見世物には，筆者が直接の切り口としてきた服飾研究に共通する学際的性格があり，氏が「押しとどめようがないもの」とされる楽しみへの想いについても，ひとが服飾を生きるエネルギーと似た印象があることなど，興味のつきないところがあったからである。本書が新書版という親しみやすい著述であったことも，氏の基本的な問題意識を辿るうえで筆者のような者には助けになってくれるものであった。このような心許ない読み手が書評などというのは，やはりおこがましいことではある。しかし『デザイン理論』の誌上でも見世物研究の一端が報告されており，本書の内容との何らかの比較も可能であるとおもわれるため，紹介を兼ねて，第1～5章の簡単な内容と共に筆者のおもうことを述べさせていただこうとおもう。

第一章　浅草奥山の籠細工

文政2（1819）年7月浅草奥山に巨大な籠細工があらわれた。三国志の英雄として知られる勇将・関羽と侍者・周蒼をはじめ，赤鬼・麒麟・鳳凰・孔雀・猪・鹿などの籠細工である。関羽は関羽髭の先まで籠細工でできた細工の見事さに加えて，座像の高さが2丈2尺（6.7m）または2丈6尺（7.9m）という巨大さが見物者を圧倒していた。さらにこれらのすべてを飾り付けた巨大な見世物小屋が聳えていた。それだけではない。『開帳見世物語』（文政4年春刊）を執筆した見世物教養人・烏亭焉馬や，さらに江戸落語中興の中心人物で歌舞伎の表裏に通じた芸能教養人でもあった十方庵敬順も，江戸とその近郊で自らが体験した浩瀚な見聞記録『遊歴雑記』（文化11～文政12年）を残した。氏は全章を通じて，これらの見聞録と錦絵や他の記録類を縦横無尽に活用して文政期を頂点とする細工見世物の空前の興隆振りを再現する。さらに口上話芸がたくみに見世物の絵解を担当し，当時隆盛しつつあった講談が関羽の登場する三国志を取り上げ，軍事講釈の一，二を争っていたし，歌舞伎の出し物にも籠細工が反映された。籠細工をモチーフにした浮世絵や噺本も出版された。氏はさらに細工見世物興行の隆盛がもたらした経済的波及効果についても論証される。それは歌舞伎を凌ぐ勢いだったという。さらに興行は伊勢に移動し，神宮参拝客をも巻き込んだ。つまり江戸という流行情報社会や当世風俗の鏡としての歌舞伎や浮世絵・噺本などのメディアと寺社参詣という人の流動が籠細工興行を爆発的に増幅させ，同時代の「娯楽の第一線」に位置づけた。ところで見世物小屋と空間的にも行為の上でも重なる花見や寺社詣で，芝居小屋や遊郭，茶屋などの遊びは，実はひとびとの服装の見せ場でもあった。服装はこうした場面に参加するための仕掛け，遊び人間を装う仕掛けであった。実際に歌舞伎を演ずる側への籠細工の影響として，役者の衣裳に籠目を採用したことが確かめられる（pp. 45-46）。氏はそれをたわいのない芸能の茶気といわれるが，服飾研究の側から見れば娯楽の享受と服飾を装うエネルギーとが分かち難く重なっていることが興味深い。

第2章　奇妙な細工の楽しみ

籠細工興行の大成功をきっかけとして，文政期には細工見世物ブームが起こった。細工見世物を作った素材の，すこぶる多様な展開や各種の細工人形が競われた。勿論これらを支えた背景には市井のさまざまな手職から，浮世絵師，鑑賞人形の細工人，芸能世界の伝統技能者までを含む，広大無辺な「職人の王国」があった。さらに明治まで優勢だった「大坂くだり」の細工興行における先導的な位置や，見世物が寺社の開帳や法要にあわせて興行されるだけでなく，仏教を当世風に見世物化してしまう「信心と遊楽の一体化」の文脈が紹介される。見世物細工を支える諸々の技能の洗練とたゆみない遊びの精神と信心との合体がここにはある。たとえばいわゆる乾物細工の中には，「とんだ霊宝」とよばれた魚の干物でつくった仏様まで登場した。これら細工見世物の着実さと機知と遊びの呼吸には，見立絵本とつくりもの文化の系譜が背景にあったと指摘される。ここまでくると筆者は，山東京伝の『小紋雅話』（寛政2年刊）等の系譜の類書における，見立てと地口の楽しさや，仏様を見立てるだけでなく，大真面目な儀礼等にも重なって見出される語呂合わせ的遊びの精神を思い起こさずにいられない。こうした見世物細工に共通する魅力は，江戸期のいわば境内の開帳文化として大衆に共有されたそれであると同時に，今日にも脈々と

受け継がれている娯楽の精神に連なるものであることが改めて理解できる。

第3章　珍しい動物のご利益

氏は近世後期の見世物の柱のひとつであった珍しい舶来動物にも注目された。舶来動物は大海を越えてやってきた有り難いご利益をもたらすものであった。長崎に渡来したゾウ，ヒクイドリ，ラクダ，ヒョウ，トラといった霊獣を一度見る者は「七難を即滅し七福を生ず」というのである。文政4年に長崎にもたらされたラクダの見世物は動物見世物の代表的なもので，10年以上にわたって日本全国を巡演したという。ラクダのご利益は盛りだくさんだ。氏は丹念に資料を渉猟されて，眼福・ご利益としての虫避け・疱瘡除け・雷除け・夫婦和合から招福財宝のラクダ七福神とでも呼ぶものまでを再現しておられる。こうしたご利益の拡大は一方でおびただしいラクダグッズを出現させ，それらが安心立命のささえとなったことも見逃されていない。さらにこれらの動物見世物が当時の異国イメージの形成に果たしたであろう役割についても示唆される。こうして見世物や行列，図像資料や文芸から，ラクダ見世物が紡ぎだした共同の幻想と心象を探り出すことに成功しておられる。見世物をめぐる楽しみと現世利益と異国イメージの交錯した心象は，明治になって開設された動物園やサーカスへと受け継がれ，「教育資料」へと変質していく。その平板さが過去についての独特の「変態」見世物観の形成に逆説的に働いたであろうことも示唆される。

第4章　軽業のよろこび

幕末安政期における江戸の見世物の代表は軽業だった。当時の日本の軽業は世界第一級のものだったという。軽業スター早竹虎吉が登場する。虎吉の生い立ちや軽業師としての来歴，興行の足跡が周辺世界の事情と共に再現され，とりわけ瞠目されるのは一座のサンフランシスコへの進出だった。虎吉に代表される所作事というのは「曲差し」「足曲持」「綱渡り」に「曲独楽」を加え，さらにからくりや細工人形もあしらった華やかなもので，細工見世物としても興行されていた「大道具大仕掛」が組み込まれていた。これに喧しいほどのお囃子と見せ場毎の口上が加わった。さらに「曲差し」「足曲持」等々は身体芸の極致であるが，それらは「石橋」「富士の巻狩」「菅原伝説」などの伝承物語世界の文脈で演じられた。氏は「そこにある原理とは，あらゆる伝統芸能の世界と趣向，絵や本の題材，口碑伝承，町の話題といった庶民の自然な共通知識から，誰が見ても面白い一曲をつくりだすこと」で，「軽業芝居」といえるような総合芸能だったとされる。

興行を支える関係業者や盛り場や神社の境内は，いわば娯楽の解放区であった。ここでは動物見世物の動物園化に象徴されるようなその後の解放区の変化や平板化はなかったのであろうか。氏はその視座に立ってはおられないのであるが，解放区の変化は現代における都市デザインの在りようをも映し出し，独特の見世物観への変化やその形成とも無関係ではあるまい。筆者は数年前に中国東北部のハルビンで雑技学校を訪れたことがある。身体芸の表現は衣裳から大道具・所作や音曲等の複合されたもので，中国文化の文脈を離れて見ることがエキゾチシズムを触発するとしても，いかに不自然なものであるかを実感した。本書によって世界に冠たる幕末の軽業日本の存在を知るに及んで，現代人としての視座の特殊性を想わずにいられなかった。

さらに虎吉等の海外興行は，幕末から明治にかけての内外の視座や諸事情もさることながら，極めて日本的であったが故に賞賛と拒

否との両面の評価を受けた。技芸や大道具や仕掛けなど見た目の華やかさについては賞賛されたが，音曲や伝承物語世界については理解を越えたものだったという。ここには当時の米国におけるオリエンタリズムや，異文化接触における相互の像の歪みの問題などが示唆されている。

第5章　生人形の想像力

この章では生人形の創始者で随一の名匠として聞こえた細工人，松本喜三郎という人物が登場する。人形は細工つくりものや軽業・からくりにも組み込まれた重要な見世物であったが，ここでは等身大を特色とする生人形を見世物とした興行が取り上げられる。この場合にも生人形つくりを支える素材や技術の問題があり，「大坂下り」が重要な位置を占めた。喜三郎の生人形つくりは生き写しを追求して人肌の表現に執着したり，当代の話題に取材した現代的リアリティや「嶋廻り」のような異界の物語世界の再現にまで広がり，4章までで取り上げられた見世物文化の流れのなかに生人形が独自に位置づけられることを検証する。さらに氏はロンドンのタッソウ蝋人形館の蝋人形やマネキン人形を中心とするディスプレイへの展開の重要性を提示される。筆者はかつてのファッション・ドールから生身のマネキン・ガールへ，さらに今日のキャンペーン・ガールやスーパーモデルへという流れにも，生人形を起点とする想像力の過剰な表現を想うのだが。一方まさしく現代的なリアリティの見世物としてのＣＧ，ＣＧ映像と実写とが融合して動き出している映像の世界，美少女アニメにおける独自の肉感的な効果等々，生人形と共通する想像力の基盤が見いだせる。現代のデジタル見世物としての生人形に，氏は「本物以上の何者かをエンタテインメントとして志向する」想像力の過剰さを見る。かつて生人形が放っていたさまざまなオーラのように，現代の生人形もまた新たな神話化を遂げつつあるのだろう。

「江戸の見世物」というテーマながら，読了してみると「見世物をどう理解するか」という川添氏の問題意識を基本的な視座に置いた読み方になってしまい，江戸という地方性については読みこなせていないことが判明した。氏も見世物における「大坂くだり」の重要性から，しばしば，江戸に留まっていられないことを吐露しておられるが，巡回興行を基本的な公演スタイルとする見世物では，地方性の切り口によって浮かび上がる側面は限定されてくるのではなかろうか。その意味では江戸の興行主や金主，興行の場を提供した寺社側の事情や，見物人を中心に読みすすめるべきであったと反省している。そして本書はそのような期待に十分応えてくれるものである。むしろここでは，氏の広範に及ぶ見世物研究の視野と鋭い洞察力に圧倒され，非力な筆者にはその一部しか紹介できなかったことを申し添えておきたい。